

北 どころ

第64号 2021年7月1日（毎月1日発行）

岡田美知代覚書②

「父、母、祖父……、 そして美知代おばさん」 原博己

私が川北町の岡田美知代の野菜もお持ちした。

家を初めて訪れて以後、足掛
け十年、昼間は山仕事や父の
百姓を手伝い、午後四時、母
が作ってくれる夕食を携えて
美知代おばさん宅へ行き、無
償で英語を習い、書生となっ
た。書生というより、雑役、
話の聞き役と言ったほうが自
然かもしれない。

美知代おばさんと私のため
に母が作ってくれた夕食は、
赤飯、山菜の炊き込みご飯、餅
栗餅、蓬餅等、餅米を使った
ものが多かった。季節の旬の

野菜もお持ちした。

美知代おばさんは、栗餅、
蓬餅、赤飯を好まれた。蓬は、
シーズン中に大量に摘んでき
て蒸して乾燥して保存し、年
中蓬餅を食すことができたの
である。保存した蓬では、旬
の独特の草餅にある香りが薄
く、緑の色も薄く、くすんで
いた。美知代おばさんは、搗

き立ての蓬餅をそのまま食べ
るのが好きだった。栗餅の
淡い食感もお好きようだっ
た。粟は玄米と一緒に精米機
にかけ、糠と一緒にになった粟

を唐箕にかけ、糠と粟をより
分けていた。

父は、餅が大好物で、田圃
一反は餅米づくりにあて、餅
米の品種にもこだわっていた。
山島で餅粟も栽培していた。
正月餅など、毎年十二月二十
八日、午前三時から餅米を蒸
籠（せいろう）で蒸して、一白

三升餅を十白搗き、搗きたて
の餅を一個分ごとに丸め平た
くして、用意した粗筵に並べ
る。間をおいて裏返す。餅に
筵の網目の跡がつく、大きさ
もほぼ同じ、長年の熟練の技
が備わっていたのだろう。並
べたり裏返したりすることも
結構忙しかった。

いつの頃から、餅搗きは父
の後を受けて私が搗くようにな
った。その日は、近所のお
ばさんも手伝ってくださった。
湯気の立ち舞う中でのわが家
の楽しい年中行事だったので

ある。余談だが、父は無類の
餅好きで、二十四歳の時、お
正月の雑煮餅を年の数だけ二
十四個食べたと話してくれた。
昔の餅は今とは比較にならぬ
大きさだったので、二十四個
と言えば、ほぼ一升餅だった
のである。

豆腐も良く作っていた。頼
まれて作ることもあった。私
の家は秋、春を通じて餅と豆

腐は切らすことがなかった。
味噌、醤油も自家製で賄って
いた。夏は柏餅をよく作って
いた。季節に関係なく、赤飯
は母の十八番（おはこ）と言っ
ていくらい、何かと言えぱ
作っていた。その味は絶品だっ
た。

あの頃、母は息子の私が世
話になっていく師、美知代お
ばさんと私のために尽くして
くれたのだと思う。母の気持
ちを思えば、感謝のほか言葉
がない。母は、美知代おばさ
んに限らず、人に尽くすこと
を惜しまなかった。

若いころ紡績工場に勤めた
ことがあり、会社が募集した
標語に応募したことがあると
話してくれた。「何事も、感謝
して微笑む人に怪我はなし」、
折にふれて聞かされたことを
今でも覚えている。

紡績工場を退職後は帰郷し
て、双三郡三良坂町（現在の
三次市内）の岡田散髪店で修
行し、資格を得て、原家（庄
原市川北町）に嫁ぐ。夫とは
従妹結婚である。私は、その
長男として生まれた。未熟児
で生まれた私は、生まれた時、
うぶ声がなかったそうである。
産婆さんがお尻をひっぱたい
て初めて、か細いうぶ声を上
げたと話してくれたことがあ



「アングル・トムズ・ケビン」を翻訳
紹介したころの岡田美知代（30代後半）。
府中市上下歴史文化資料館蔵。

る。

幼児の私を当時としては珍しく度々写真屋へ連れて行き、着るものにもこだわった写真を撮って残してくれている。どの写真も活気のない見るからにひ弱な顔であるが。

病弱で小学校へ上がるまで、かかりつけの医院へ度々入院することもあった。畳敷きの小さな部屋だったことを、臆に覚えている。扁桃腺の手術をして大暴れして先生を困らせたことも覚えている。小学三年の時、ジフテリアで一か月、自宅隔離、治りかけてお多福風邪になったことも覚えている。四年生の時、肺炎で四日学校を休んだことも覚えている。私のために母の苦労は絶えることがなかったのである。私は母の苦労に報いることをしたであろうか、歳をとるにしたがって父母を敬い感謝の気持ちは強くなるのに、その幾倍

昼間は薪作りの山林労務 夕方から美知代宅に通う日々を十年

私は、父の百姓の手伝いと気ままな山林労務が仕事だった。山林労務の初期の三年は、引き籠りの生活だった。その苦しい時期を経て後の美知代おばさん訪問だった。

当時、我流俳句を地方新聞の俳壇へ投句していた。入選して新聞に載れば必ずお赤飯を炊いてくれる母だった。美知代おばさんの所へ行く

もの親不孝を思わずにはいられない。

いつも変わらぬ母の微笑みの優しさ、無口で根気強かった父、日露戦争に従軍した祖父は、戦争のことは一度も口にすることはなかったが、寛容でおおらかな性格だった。また祖父は、鶏道楽とでもいうのか、様々な鶏を飼っていた。貝殻を槌で砕いて青菜を刻んで、餌つくりを手伝った。田植えの準備で田圃を耕すため牛を使う仕事も、すべて祖父から教わった。牛一頭、馬一頭、絶えたことはなかった。

父は荷馬車で運送の仕事もしていた。馬道楽で、九州から小ぶりの野生馬を買ってきて野良仕事を仕込んだ。馬は父の思い通りに仕込まれ慣らされていた。一時、白馬を飼っていたこともあった。馬が体調をこわしたりすると、一夜を馬小屋で過ごすこともあった。

ことを一番喜んでくれたのも母だった。

私の山林労務は当時の燃料の薪作りだった。雑木を倒し、尺二寸に切り揃え、斧で割り、金輪で結束し、一束十円の賃仕事だった。

薪は数日、日にさらしてから結束した。すぐ結束すれば乾くにしたがつて詰めた薪に緩みが出て束木として

固定せず、商品価値も下がるからだ。時には割投げした薪の上に寝転んで、時を忘れたかのように、ぼんやり雲を眺めていることもあった。寝心地は悪かったが、夏など冷たい割投げの薪に寝転ぶとひんやりして、生木の香りが心地よかった。

たまに吹く木立をゆする風の音、下のほうで犬の鳴く声がして、キツネが私の近くを、時おり後ろを振り返り、振り返りしながら通り抜けて行き、切り株に両足をかけてまた後ろを振り返っている。私は寝ころんだまま、その様子を見ている。そんなさやかな出会いも鮮やかに心に残っている。

私にとって一番美しく心に残っているのは、気ままに働かせてもらった山林労務の日々だ。ことに初夏の風が新樹をゆする音、山間を霧が流れ退く壮観さ、紅葉期の山並みの絵巻のような美しさ、記憶の中に深くどまっている。

しかし、三年に及ぶ引き籠りは、原因不明の不眠、背中の激痛、人に会いたくないという思いを強くした。その苦痛は耐えがたいものだった。

背中の激痛は、かかりつけの医院の先生からカリエスを疑って調べてくだされたが、原因はわからぬまま、病名は脊椎過敏症と言われたのを覚えていた。それを克服できたのは、父母の心遣い、自然の魅力に没入できたことだった。自然は私をそのまま受け入れてくれた。四季折々に変

化する自然の表情ほど美しく心癒されるものはない。

美知代宅へ通った足掛け十年、昼間は主に山仕事の日々だった。早朝、六時に家を出て、午後二時過ぎに帰宅、家のすぐ前が県道で、もちろん舗装されていなかった。毎日、山から帰ると家の前の水まきがいへんだった。背戸に出ると小道を挟んで水路があり、バケツに水を汲んで中庭を抜けて道路に水まきするのが日課だった。

母屋から納屋、牛小屋、駄つなぎまで、五十メートルほど、自宅は奥行きのない道路に面して細長い何かと不便な敷地だった。水まきをして、仕事着を普段着に着がえて、母が作ってくれた夕食を携えて美知代おばさん宅へ急いだ。

そのころの唯一の楽しみは読書だった。カールヒルティの「心の糧」という文庫本に出会った。幾たびも繰り返し読んだ。白水社の全集十一巻を買った。主に読んだのは「眠れぬ夜のために」三冊と「幸福論」二冊だった。

美知代おばさん宅では、味噌汁などは私が作った。母仕込みの具を沢山使った味噌汁を作った。味噌汁とは、そういうものだと思います。美知代おばさんは喜んで食べてくれた。具沢山は、栄養を考えての田舎料理の一つだったのかもしれない。

(次号へつづく)

俵万智・歌集『サラダ記念日』

——280万部大ベストセラーの秘密

「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言ってしまったいいの」。こんな、若者の日常の言葉で綴った歌集、俵万智『サラダ記念日』（河出書房新社刊）がたちまちに280万部の大ベストセラーになったのです。1987年のこと。若者の政治離れが決定的となり、若者が自らのカルチャーを自らの言葉で歌った出来事でした。

誰もが予想しなかったことなのです。俵万智は、早大卒業して横浜の高校教師となり、この歌集にも収めている「八月の朝」50首で角川短歌賞を受賞して、すでに注目されていたのです。430余首を集めて持ち込んだ角川書店は「新人の短歌は売れない」と出版を断り、他社の「勇氣ある」編集者が用心深く3千部を出版したのでした。

歌集は、出版の年まで5年間の俵万智の生活の記録です。とはいえ、独身の若い人の頭の中は恋愛です。次々と複雑に湧いてくる恋愛感情を包み隠さず歌っています。

冒頭は「この曲と決めて海岸沿い

の道とぼす君なり『ホテルカリフォルニア』。「ホテルカリフォルニア」とは、英国のグループサウンズのイー

の目が光ります。ぼつてりとだ円の太陽自らの重み

・線を引くページ破れるほど強く「信じることなく愛する」という
・我だけを想う男のつまらなさ知りつつ君にそれを望めり
・そして、さりげない風景にも機知

また読んでみたい本⑥2

——青年たちに

音谷 健郎



【河出書房新社版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第62回は、俵万智の歌集『サラダ記念日』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

グルスが歌い世界的にヒットした新

曲です。俵万智を助手席に載せてこの曲をかけ、横浜の海沿いを颯爽と疾走するクルマを想像させます。絵になる光景です。

・沈黙ののちの言葉を選びおる君のためらいを楽しんでおり

に耐ええぬように落ちゆく

父親は、高名な物理学者。でも素顔は、娘が気になる普通のお父さん。少しだけ登場します。

・「まだ恋の歌を作っているのか」とおもしろそうに心配そうに
・電話から少し離れてお茶を飲む

いてないよというように飲む

・広島カープを歌ったものがあります。大阪生まれなのです。タイガースではなく、カープというのが小さな反骨でしょうか。

・我がカープのピンチも何か幸せな気分で見おり君にもたれて

歌集も、後半になると、恋愛歌にも複雑な陰影が出てきます。それに加えて、日々の生活感覚がにじみでます。

・宝くじを買って二人の逃避行もその世界地図を広げる

・もうそこにサヨナラという語があつて一問一答式の夕暮れ

・締めくくりは、「愛された記憶はどこか透明でいつでも一人いつだって一人」

歌集全体が物語のように展開しているのも、この歌集の引力です。想起するのは、若き啄木が「はたらけど／はたらけど猶（なほ）わが生活（くら）し」楽にならざり／ぢっと手をみる」と口語体で歌って、時代を

一歩進めた『一握の砂』から約80年、『サラダ記念日』が、典雅な短歌の世界を再び強く揺さぶったのは間違

いありません。

次回、吉本ばなな『キッチン』

を取り上げます。

比婆山連峰の自然(7)

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

5. シバ草原消失の影響

シバ草原の消滅によってもろに影響を受けているのは、食糞性コガネムシ類である。比婆山連峰内からはミヤマダイコクコガネなど15種が記録されている(中村、1977)。そのうち、吾妻山から記録されていたミヤマダイコクコガネは、水田・他(1972)が「吾妻山では1日の調査で約50頭」を確認してから後、



ミヤマダイコクコガネ

1977年ごろはすでに激減し、2003年の「広島県の絶滅のおそれのある野生生物(改訂版)」では絶滅の危険1類に指定されていたが、2012年に発行された「広島県の絶滅のおそれのある野生生物(第3版)」では、絶滅となつている。ミヤマダイコクコガネの吾妻山で採集された標本(10、VIII、1955、中村採)は、庄原市立比和自然科学博物館に保存されている。

竜王山や吾妻山ではごく普通に生息していたゴホンダイコク、ツノコガネ、オオフタホシマグソコガネは、竜王山の場合、1966年、放牧が中止されると共に姿を消し、吾妻山の場合は1980年代はわずかながらも採集されていたが、1990年代は激減してきわめて稀に採集できる状態であった。しかし、2000年以降は全く採集されていない。現在、「広島県の絶滅のおそれのある野

生生物(第3版)」では、ゴホンダイコク、ツノコガネ、オオフタホシマグソコガネの3種は、準絶滅危惧に指定されているが、竜王山と吾妻山では絶滅したと考えられる。牛糞に依存していたマエカドコエンマコガネなど残り11種も、竜王山では1966年以降、吾妻山では1985年以降採取されていないから、ゴホンダイコクコガネなどと同様、姿を消したといえる。

比婆山連峰内の日当りのよい草原、例えば、竜王山の山頂部のシバ草原、吾妻山のシバ草原からは、ウラギンヒヨウモン、オオウラギンヒヨウモン、ウラギンスジヒヨウモン、オオウラギンスジヒヨウモン、ミドリヒヨウモン、クモガタヒヨウモン、メスグロヒヨウモン、ツマガグロヒヨウモンの8種が確認されている。吾妻山では、「広島県の絶滅のおそれのある野生生物(第3版)」で、「絶滅」と

されているオオウラギンヒヨウモンが、1951年ごろまで、僅かながら姿を見せていた。

シバ草原がスキ草原へ遷移した竜王山と大膳原では、8種のヒヨウモンチョウの中で最も個体数の多かったウラギンヒヨウモンも見ることができない。これはシバ草原の林縁に多いオオタツボスミレが衰退したためである。吾妻山の場合はハルガヤ草原となつているが、オオタツボスミレが林縁に残っているから現在も毎年発生している。オオウラギンヒヨウモン、ミドリヒヨウモンなど6種は少なく、替って多化性のツマガグロヒヨウモンが多くなつている。

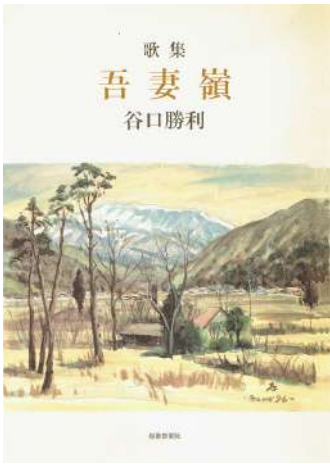
このようにシバ草原のスキ草原への遷移、ハルガヤ草原化は、シバ草原固有の食物連鎖を崩し、生物の「種の多様性」に翳りをもたらせている。

吾妻山の魅力

中国新聞「セレクト」
(2019年4月4日「想」欄に掲載)

庄原市比和町森脇と島根県奥出雲町横田字大馬木との境にそびえる吾妻山は、比和町のシンボルといえる名峰である。広島藩の地誌「芸版通志百三十五 備後恵蘇郡三」の「山林」に「吾妻山 森脇村あり 麓は越原谷および出雲仁多郡大馬木村に互る」と記されているから、山名は恐らく200年前までには成立していたと考えられる。

吾妻山の由来は明らかではないが、森脇八幡神社第16代宮司であった谷口勝利は、社家に伝わるその由来を、彼の第4歌集「吾妻嶺(ね)」の序歌「山旗雲長歌并反歌」で「(前略)嶺に立ちたる父は 真向かへる 峯を指差し かの山は御祖(みおや)の女神・伊邪那美神(いざなみのか



み)を葬りし 御陵(みささぎ)の比婆山なるぞ 夫の神の伊邪那岐神(いざなぎのかみ) 妻恋ひに慕ひ来まして 此処にして見放(みさ)け給ふや 神狂(かまくろ)はし神嘆きつつ 吾妻はや吾妻はやとぞ 彼の峯に呼びかけ給ひ 雄叫び給ひき ここを持って此の山は吾妻山と呼ばれけるぞ(後略)」と詠んでいる。

吾妻山と、これに連なる比婆山は神話のロマンに満ちているが、吾妻山は地質学的にも魅力に富む山である。新生代第三紀中新世に堆積した「備北層群」が、基盤となる高田流紋岩を不整合に覆い、さらに備北層群の上は第四紀の火山活動で噴出した玄武岩が覆っている。この備北層群は「シヨウバラクジラ」の化石を産出する西城川の川底より約800m高い所にあり、吾妻山をジオパークとして活用する道が残されている。

吾妻山は植物の(種の)多様性に富む山である。「植物学の父」と呼ばれている牧野富太郎を招き、吾妻山で開かれた「採集会」から83年後の2015年、庄原市立比和自然科学博物館は、3年間にわたる調査を開始し、昨年、「吾妻山植物誌」を完成することができた。

「つれづれ歌談」⑬

松岡 初枝

七夕の夜は有名な恋人達が年に一度の逢瀬、織姫と彦星の待ちに待った夜です。いつもはお堅い感のある憶良、家持が、何とも色っぽい歌を詠んでいます。

・天の川相向き立ちて我が恋し君来ますなり紐解き設(ま)けな

山上憶良
・織女(たなばた)し舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ち渡る 大伴家持

憶良は、天の川を隔てて向き合っているにも逢えないあなたは今夜来る。下着の紐を解いて待っているワ。家持は、待っていていられない。私が舟に乗って行ってしまお



う。舟が立てるさざ波で、きれいな月夜に雲が掛かってしまったワ。それぞれ大胆な女心!

それにしても、織姫の心情を代弁しているばかりか、古代の女の積極性、行動力を代弁していると思うと、男も女もやるもんですね。・石麻呂に我物申す夏瘦せに良しといふものそ鰻(むなぎ) 捕り喫(め)せ

・瘦す瘦すも生ければあらむをはたやはた鰻を捕ると川に流るな

二首 大伴家持
瘦せ身の石麻呂をからかい気味に、鰻を捕ってお食べなさい。鰻を捕る時瘦せ身のあなた、川に流されないでよ。家持の父旅人と、石麻呂の父が知人どうしなので親しみがあるゆえの気楽さもあって、笑える二首です。

江戸時代になって、平賀源内はこの歌をふまえて鰻屋のキャッチコピーを思いつき「本日土用丑の日」と書き、夏のスタミナ食を流行らせました。おかげで鰻屋は大繁盛。今でも丑の日は鰻のかば焼き。

私も鰻は好物、今年もいただきます。

(今日も来てるな)

店頭の漫画コーナーで、一心に漫画を読んでいる。小学校の二、三年生ぐらいだろうか。紺地の半ズボンにおかっぱ頭、どこかで会っているような気がするのだが、思い出せない。

雨の日なので、今日は客は少ないだろうとのんびり本を読んでいたら、鍼灸師の周さんが顔を見せた。無類の愛猫家で、寅次郎というキジトラの雄猫を飼っている。

「調子はどうですか？」

気遣ってくれるのはありがたいが、そっとしておいてほしいという想いもある。

「駄目ですね」

正直に答えた。飼い猫のドラマを病気で喪くして一月余り、モフモフした体の感触が掌に残っている。

「夢をよく見るようになりましてね」

部屋に戻っても、手持無沙汰でベッドに入る時間が早くなった。

「それも、今までに見たこともないようなオールカラーの夢なんですよ」

「ほおと周さんが顎鬚を撫でた。」

「色っぽいお姐さんは出てきますか？」

「だといいんですがね」

「夢魔……、サキユバスじゃあなさそうですね」

周さんは博覧強記、うちで買う古本もマニアックな本ばかりだ。

サキユバスは夢の中に出てきて男の精気を吸い取る西洋の悪魔であり、淫魔とも呼ばれている、ぐらいは、わたしも知っている。

「夢に見るのは、大概が昔の出来事なんです。困った状況に追い込まれて、

思わず相槌を打った。枕元で前足をピンと揃えたエジプト坐り(エジ

プトの神話の女神が由来)で、わたしを見下ろしている。いつになく彫

像のような冷めた視線にたじろいた。「あれは、猫が見張りをしてくれているんです」

「布団の中に潜り込んで、一緒に寝ているときの方が多いですけど」

「危険を察知したときだけです」

雨の訪問者

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑤⑧

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

それがどんどん悪化していくんです……」

昨日は車で山中の隘路に迷い込んで、進むにつれて道が狭くなって、最後は崖から転落した。

「猫の夜警！」

周さんが声を張り上げた。

「夜中に目が覚めたときに、ドラマがあなたのことをジッと睨んでいることとはありませんでしたか？」

侵入してきた……」

周さんが頷いた。

「どうすればいいんですか？」

「新しい猫を飼うのが簡単ですが、その猫が野生の本能というか勘、いや、靈感かな。その能力を持っているかどうかが問題です」

ドラマは野良の暮らしが長かった。

「うちの寅次郎をしばらくお貸ししましょうか？」

周さんがニヤリと笑った。

「お気持ちだけ、ありがたく頂戴しておきます」

周さんの鼻には、マタタビ酒で酔った寅次郎に噛まれた痕がまだ残っている。周さんは天邪鬼で、どこまで本気で言っているのかわからないところがある。

「これをもらいましょうか」

周さんが差し出した本は「狗張子」、元禄時代の初期に釈了意が著した伝奇物語で、上田秋成の「雨月物語」の源流だと言われている。

「まだ降ってますね」

雨足は強いままだ。

「涙雨ですね」

いつも一言多いのだ。

「あれ？ あの子、もう帰ったのかな？」



「誰かいたんですか？」
 「子供が漫画を読んでいたでしょ？」
 「いや、誰もいませんでしたよ」
 「そんなはずは……」
 「座敷童ですかね？」
 周さんが愉快そうに笑った。

夢を見ているのだという自覚はあった。まだ小学生だった頃のこと
 で、みんなで川に遊びに来ていた。
 おれは割れた牛乳瓶の欠片を踏んで
 しまい、一人で河原に坐っていた。
 (うん?)

気配を感じて隣を見ると、見知らぬ子供が坐っている。そのおっぱ頭に、この子だったのかと、店頭で漫画を読んでいた子供の顔を思い浮かべた。

「泳がんの？」
 尋ねると無言でニツと笑った。おれは、川に沈めておいた筈からトマトを二つ持って来て、一つ渡した。

おれが半分も食べないうちに、ヘタまで残さず食べてしまった。無言で掌を突き出すと、蒼く透き通った平たい石が載っている。
 「ありがとう」

お礼を言っって石を受け取ると、またニツと笑った。

ジリジリと瞼が焼かれる感覚で目を醒ました。いつの間にか、うたた寝していたらしい。辺りを見渡すと、おかつぱ頭の子供の姿はなかった。

ズックを脱いで右足の裏を見ると、傷口の血は止まっている。靴底のギシギシの葉っぱを入れ替えて、また右足だけズックを履いた。真夏の太陽を浴びて、肌がヒリヒリと火照っている。少しぐらい泳いでも大丈夫だろうと、水辺に向かった。

(やめろー)
 叫んでも声は届かない。ザブザブと水の中に入って泳ぎ始めた。そし

て、急激に体が冷やされて足が痺れ、おれは溺れるのだ。川底に敷き詰められた丸石の美しい光景を鮮明に覚えていた。

ガボガボと水を飲みこんで薄れて行く意識の中で、伸びてくる掌を見た。水の中まで差し込んでくる太陽の光を受けて、指の間の透明な膜が見えた。

(水かきろ)

気づいたときは河原で仰向けに横たわっていた。一緒に川遊びに来た子供たちに囲まれている。これは夢の中での出来事なのだろうか。それとも、実際に経験したことなのだろうか……。

その夢を見た翌朝、梅雨が明けた。あのおかつぱ頭の子供がやって来ることはなくなった。

店頭では、野菜の無人販売をやっている。農家の余った野菜を一袋百円で販売しているのだが、代金は料金箱に入れてもらうようにしている。

ある日の閉店後、料金箱を確認していたら、百円玉の中に混じって、透き通った蒼い平石が入っていた。

買ってくれたのはトマトだろうか。それともキュウリだろうか。わたしは、晴れやかな気持ちで笑った。

まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「藝人春秋」

水道橋博士 著 文藝春秋

芸人の余技という先入観で読み始めたが、人間洞察が深くてなかなかの名文なのだ。そのまんま東、石倉三郎、三又又三、稲川淳二等々、そしてお笑い界のドンである北野武と松本人志。ミュージシャンの甲本ヒロトや草野仁、堀江貴文が入っているのは「芸能界の人」という広義の意味か。



大学を4日間で辞めて、「ゴキブリホイホイ」の中にあるような4年間が過ぎ去ったとき、たけし軍団の“徴兵”を志願する。暗黒の青春時代を過ごした作者の「イジメ論」は人間の本質をえぐって説得力がある。「楽しいことは楽(ラク)じゃないんだよ」、永遠の14歳、甲本ヒロトの言葉が心に残った。

「夢をかなえるゾウ」

水野敬也 著 飛鳥新社

シリーズ累計430万部を突破している大ベストセラーの第1作。夢を無くした平凡なサラリーマンが、象の顔をした神様・ガネーシャのレクチャーを受けて自己改革する物語。ヘビースモーカーで食い意地がはって、怠惰でジコチューという反面教師のガネーシャのキャラが、本質である「道徳」臭を見事に消している。



偉人の逸話や教訓、名言がたくさん出てくるが、そうした書物を読んで意識を変えただけでは、人間は何も変わらない。一歩踏み出して環境を変える必要がある、こうして書くと説教臭いが、それを読者に納得させてしまうのが作者の力、物語の力だろう。何歳になっても夢は見たいのです。

「ほお…、 ここがちきゅうのほいくえんか。」

てい先生 著 KKベストセラーズ

男の子が段ボールで剣を作って、「せんせい! みて!」と見せてくれたので「おお、すごい! 誰をやっつけるの?」と聞いたら「だれをやっつけるんじゃない! だれをまもるかだ!」と答えた。僕は何だか恥ずかしくなった。

女の子に「せんせい、どうしたらおとなになれるの?」と聞かれたので「うーん、20歳になったらかなあ」と答えたら、そばにいた男の子が「『こどもになりたい』とおもったらじゃない?」と素敵な答えを言った。



保育士のツイッターのつぶやきが本になった。こどもたちに翻弄される大人の姿がほほえましい。よく売れている。ネット時代らしい本だが、わたしも傷心が癒されました。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

特別寄稿

「菊と木簡」

高柴順紀（菊栽培農家）

「菊」を探しているところでもないところから出て来ます。

かつて奈良のそうデパート建設予定地から歴史書などで奈良時代の政変劇で自死した悲劇の人として知られている長屋王の邸宅跡が偶然見つかり、同所から発掘された数万点の木簡は長屋王の生活ぶりを生き生きと示すものとして大きなニュースとなりました。しかし私にとっては何といっても「菊」の文字が認められたたった一つの木簡が一番だった。それは土の中から写真のような「菊」を賦した詩が出てきたのですから。

丁度今、「県北どらくろあ」では万葉の名歌を美しい文章で松岡初枝さんが「つれづれ歌談」を連載されて



長屋王邸宅跡から発見された「菊」のことが書かれた木簡
(出典：奈良文化財研究所・木簡庫データベース)

おり、歌の背景にある天皇家一族の後継争いをそれとなく説明されています。木簡もまさにその時代のものでしたのです。

さて、万葉集には何故か「菊」は出て来ませんが、万葉集(759年)と同時代と言っても良い日本で初めての漢詩集『懐風藻』(751年)には「菊」を賦した詩が、それも長屋王自身のものや王宅で作られたものも収録されているのです。当時の文化人達のサロンにもなっていたようで、ここでは漢詩など門外漢なので「菊」の出ている一行だけ紹介します。

長屋王 五言 於_二宝宅_一宴_二新羅客_一
菊浦落霞鮮

田中浄足 五言 晚秋於_二長王宅_一宴

徹前菊気芳

安部広庭 五言 秋日於_二長王宅_一宴

新羅客_一

傾_二斯浮菊酒_一

藤原宇合 七言 秋日於_二左僕射長王宅_一宴一首
泛_レ菊丹霞自有_レ芳

これらは菊花を見て創作したとは思えません。中国の高度に発達していた制度や文化宗教など全てを取り入れようとしていた当時の人達の知の一端が垣間見られる気がします。想像の中の「菊」を詠っているのかもしれない。一方で自分の身の回りのことなどを詠った万葉集に「菊」が出ないのは菊がまだこの時代には渡来していなかったのだという人たちもいます。ともあれ問題の木簡には次のように記されていました。

山東_二南落葉錦_一
山上_二徹下白雲深_一
独对他郷菊花酒
破淚漸慰失侶心

仙人の言葉を信じて山に登り難から逃れたという故事を基とする重陽の日には、山へ登り菊花酒を飲みながら故郷の亡き友のことを思う内容です。長屋王宅で誰が書いたのでしょうか。唐の詩人の歌にも似た内容のものが在るようで勉強ぶりが想像できます。

歴史に残る「長屋王の変」とは左道(邪道のこと)をしていると誣告(ぶこく、事実を曲げて告げること)を受けた三日後には家族ともども自死した一件ですが、非情にもこのサロンで菊を詠んだ藤原宇合(うまかい)が兵を従えて長屋王の屋敷を囲んだのです。これで政権を担っていた左大臣長屋王が消え、その後藤原一族の摂関政治が永く続くこととなります。このことから後世の歴史家は藤原一族の策略であったとしています。

長屋王はか弱き文人政治家だったかもしれませんが、大量の木簡を残したことで後世の学問に役立っているのだから世の中分りません。おまけに「菊」が書かれている木簡にこだわった人間もいるのですから。ところで宇合も長屋王と同じく万葉集に和歌を残しています。昔から文人は時代に翻弄されるようです。

〈参考文献〉

- 奈良国立文化財研究所編『平城京長屋王邸宅と木簡』(吉川弘文館、1991年)
- 辰巳正明『悲劇の宰相長屋王』(講談社選書メチエ、1994年)
- 江口孝夫『懐風藻』(講談社学術文庫、2000年)

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

紫陽花の百花老残逃げられず

近藤 昌平

陽に梳かれ風に梳かれて栗の花

富久光

雨上がる宙へまっすぐ今年竹

片岡 正人

傘まわし帰る子供に梅雨の雨

西谷 白及

紫陽花や公園の道右左

隆愚

椅子離し接種待ちをり青田風

大槇 三代子

恩讐も洗い流せよ男梅雨

赤川 冬人

桜桃忌^{こぞ}去年も今年も鬱々と

松岡 初枝

うす紅色のサクランボ^は食む

投稿&寄稿

候のことば

「土用入り」

隆愚

夏の土用は、立秋前の十八日間のことばで、七月二十日ころに土用入ります。その土用の時期にある丑の日が、土用の丑の日。暑い盛りで夏

ばてしないように、うなぎをはじめ、土用しじみ、土用餅、土用卵、など精のつくものを食べる習慣が広まりました。年によっては丑の日が二回あり、それぞれ一の丑、二の丑と呼ばれます。また、土用入りは梅を干すころです。

土用鰻店ぢゆう水を流しをり

阿波野青畝



「収集癖」

赤川仁洋

愛猫のドラマを喪くして、部屋の整頓を始めた。簡単にするつもりが、いつの間にか大掛かりな「模様替え」になってしまっている。

いろんなものを溜め込んでいて、自分でも驚いた。飲食店に入ったときの箸袋や紙ナプキン、変わり種ではポケットティッシュに入っていた風俗店のエロ広告。数があるので見入ってしまい、嵩張らないので処分は保留、缶コーヒーのコレクション

は資源ごみの袋に押し込んだ。二袋が満杯になってしまった。

悩ましいのが、膨大な数のチラシ類。東京に住んでいた頃にせっせと集めていたものだ。映画はもちろん、演劇や美術展、本やイベント、店の広告など、あらゆるものを集めていた。無職時代も含めて、エンゲル係数の高い生活をしていたので、お金のかからない図書館通いとチラシ集めが楽しみだった。

かなり遠方の図書館でも、小旅行気分ですら出かけた。繁華街に出たときは、映画館やチケット売り場、本屋巡りをしては、せっせとチラシを集めていた。デザインが気に入ったチラシは、自分のホームページで紹介。題して「チラシ美術館」、どら書房をオープンしたときは、店の二階の一室にリアルな「チラシ美術館」を作って収集品を展示したいと考えていたが、今は古本在庫に占領されて、時間的な余力もないというようにやく気づいた。

こんな紙屑を収集する馬鹿は他にいないだろう。それだけ希少なのだと大切に保存していたが、そろそろ選別しなくてはいけない時期(年齢?)にきていると自覚。ああ、人生は有限なり(苦笑)。

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

● **一 硬式テニス参加者募集 一**
MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内&屋外コート
・火曜日 (9:30 ~ 12:00)
・水曜日 (9:30 ~ 12:00)
・土曜日 (10:00 ~ 12:00)
● 連絡先：中川 (☎070-8991-1682)



「仲間になってください」

障害者や高齢者の施設に出向いていろんな行事のお手伝いをしたり、災害被災者の救援活動をしています。「出来る時に、出来る事を」をモットーに、活動を楽しんでいます。

福祉ボランティアグループ・庄原市まちづくりを進める市民活動登録団体
ほほえみの会

連絡先：寺岡隆行 (TEL&FAX 0824-72-2793 携帯 090-7540-9029)

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター(現地記者)募集!
- ※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家(徳岡佛性坊)として多彩な活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品の展示販売を、どら書房の一角でしています。
茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を展示しています。あなたのお気に入りの逸品が見つかるかもしれません。
※天井が低いので頭上注意!

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売(値札のないものは百円均一)。
毎週水曜日の朝に入荷予定。

●黒ニンニク好評販売中!●
(青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの効果が期待できます。

(80g入り 500円)

※売り切れのときはご容赦ください。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183
協賛: 九日市愛好会

編集後記

◇「岡田美知代覚書①」
を讀んでいただいて、
岡田美知代の名前を初
めて知ったという方も
多かったです。今
回は、昔の里山の生活
が詳細に書かれてい
て、憧憬を覚えまし
た。
◇「虫と草木と人びと」の
ミヤマダイコクコガネの画像
は、「夜間飛行」灯火にあつ
まる秋田県の昆虫」のサイ
トから転載させていただき
ました。カッコイイです。でも、
広島県では絶滅……。
◇高柴さんの特別寄稿、誌面
の格調が一段上がったよう
な気がします。
◇「九日市」は六月を中止し
ただけで、七月は復活です。
切り札のワクチン接種も進ん
で、今度こそ、このまま収ま
ってほしいですね。

第 241 回

しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 3 年 7 月 9 日 (金) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

7 月 8 日～10 日 10 時～15 時

宮川さんの似顔絵展

★どら書房 →休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休み

但し、九日市の日は営業します。

★楽笑座で「まかない食堂」中 止

★楽笑座で「うた声喫茶」中 止

★きくや →総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍 →九日市スペシャルで餃子 200 円！

★カフェ・クラウド→タピオカドリンク 100 円引き

九日市特製テリヤキチキンピタサンド 600 円

出店配置図



出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

